

第 15 回国際伝熱会議の京都開催決定

*Kyoto Approved as the Venue for the 15th
International Heat Transfer Conference*

笠木 伸英 (東京大学)

Nobuhide KASAGI (The University of Tokyo)

e-mail: kasagi@thtlab.t.u-tokyo.ac.jp

1. 京都開催が決定

去る 8 月 13 日, シドニーで開催された国際伝熱会議アセンブリー会議において, 2014 年の第 15 回国際伝熱会議の京都開催が票決された. ここに, 日本の伝熱研究コミュニティの皆様にお伝えし, 共にこの喜びを分かち合い, 同会議招致委員会の報告としたい.

2. これまでの経緯

2004 年夏, 国際伝熱会議アセンブリー委員の荻野文丸先生から, 2014 年開催の第 15 回同会議を日本へ招致する可能性を検討してはどうかと, 当時の伝熱学会理事会へ打診があった. そこで早速, 荒木信幸会長を中心に検討を進めたが, 1964 年の東京開催以来相当の年月を経ていること, 日本の伝熱研究がさらに隆盛の向きにあること, 会議組織開催に財政的な見通しがあることなどから, 再度の日本開催を申し出る方針を同年 9 月の理事会で決定した. 2006 年のシドニー, 2010 年のワシントン DC, そしてその先の話ではあったが, 決断の時期を逸してはいけなと, 理事会の総意はまとまった. 11 月アナハイムで開催されたアセンブリー会議で, 荻野先生, 同委員の庄司正弘先生から日本の熱意を伝えていただいた.

アセンブリー会議後, 日本と中国が立候補したこと, イタリア, カナダも立候補するかもしれないこと, 2014 年の国際伝熱会議招致には, 2006 年 4 月までに正式に申請書を提出し, 2006 年 8 月シドニーにてプレゼンテーションを経て, 投票で開催地が決定されること等が伝えられた. これを受けて, 伝熱学会に, 第 15 回国際伝熱会議招致委員会を設置すること, 同委員長を笠木 (当時副会長) に委嘱することが 12 月の理事会で決定された. その後, 同委員が委嘱され, 以下のように委員会が構成された. (所属・役職は当時, 順不同)

荻野文丸 (舞鶴高専, アセンブリー委員)
庄司正弘 (産総研, アセンブリー委員)
工藤一彦 (北海道大学)
太田照和 (東北大学)
西尾茂文 (東京大学, TSE エディター)
長野靖尚 (名古屋工業大学)
牧野俊郎 (京都大学, 日本機械学会熱工学部門長)
武石賢一郎 (大阪大学, 伝熱学会副会長)
門出政則 (佐賀大学, 伝熱学会企画部会長)
笠木伸英 (委員長, 東京大学, 伝熱学会副会長)

上記委員会では, 様々な角度から国内の開催候補地などの検討を慎重に進めた結果, 平成 17 年 4 月の伝熱学会理事会に, 京都を開催地, 開催の実務を担う実行委員会委員長を吉田英生教授 (京都大学) に依頼して招致活動を行うことを提案し, ご承認いただいた.

その後, 吉田先生を中心に, 岩井裕先生そして地元京都市に縁の深い方々によって, 京都開催提案書作りが 1 年掛かりで始まった. 提案書には, 京都市長・京都府知事の歓迎書簡, 京都の歴史と



京都開催提案書の表紙

文化、京都生まれの先端技術、会場となる京都国際会議場などの情報がカラフルな写真等と共に盛り込まれ、本年春には誠に魅力的な提案書ができあがり、期限までに予定通り提出することができた。最終的に、提案書を提出したのは、中国と日本だけとなり、アジア地区の中での招致競争となった。

去る5月の伝熱シンポジウム期間中での招致委員会では、本番までにどういった招致活動が可能かを再検討し、各国のアセンブリー委員に京都開催の優れた事項を十分理解していただくことが重要であるとの認識から、委員長から各アセンブリー委員あての書状を提案書と共に郵送すること、併行して招致委員会委員が手分けしてアセンブリー委員個人へ電話、メールあるいは面談を通じて、日本支持を依頼することとした。

8月に入り、吉田先生とパワーポイントの内容の詰めの準備をしたり、各国アセンブリー委員の反応などを集計したりしたが、事前の読みでは我が方がやや有利という予想でシドニー入りすることができた。

本番の8月13日正午、アセンブリー会議は軽食ランチから和気藹々とスタートした。我が日本チームは、アセンブリー委員の庄司先生、吉田先生、そしてオブザーバーの岩井先生、筆者の4名であった。予定議題の後半で、次回のワシントンの開催準備が報告された後、次々回の開催提案のプレゼンテーションと質疑が始まった。コイントスで日本が先となり、筆者が口火を切って提案に至った経緯を概説し、その後吉田先生がビデオも使ったプレゼンテーションを行った。二人で直前まで煮詰めたPPTには、日本開催の際にどんな新しい企画を取り入れるかについても、工夫と意気込みを盛り込んだ。例えば、Fahrenheitの水銀温度計から300年という年にも当たる2014年に、温度計測の学生コンテストを計画するというアイデアなどである。

日本のプレゼンテーションについては、ウェブ上の査読システム、会議場の交通の便、ホテル、登録料、新しい企画行事などについて質問があったが、出席者には日本の提案が十分信頼性のあるものとして理解をして頂けたと感じた。その後中国は、北京工業大学の馬重芳教授がプレゼンをされ、中国の隆盛と各国の協力を求めるなど、中国

らしい話しをされた。その後、日中の関係者すべてが退室を求められ、残りのアセンブリーメンバーで討議を経て投票後、我々は再入室して、日本開催決定を伝えられた。ここで、日本の関係者一同、ほっと安堵した次第である。

2. 2014年開催に向けて

国際伝熱会議の東京開催の時、筆者は博士課程学生でマイクを持って会場を走るアシスタントであった。以来、30年以上経つが、国際伝熱会議は“伝熱オリンピック”とよばれるに相応しく、脈々として世界の伝熱研究のマイルストーンを築いてきたと言える。そのような会議の8年後の京都開催が決まったことは、我が国の伝熱コミュニティにとって素晴らしい目標ができたとも言える。“オリンピック”開催は地元の負担は大変で、今後オールジャパンで本格的に開催のための準備が必要であるが、もうひとつはそれをバネに我々が力を付けることでもある。伝熱研究は、シドニーの国際伝熱会議にみられるように、今確かに一回り大きなスコープと新しい進展の兆しを見せ始めていると言える。新たなチャレンジとして、2014年に日本の伝熱コミュニティが次世代の伝熱研究の方向性を示すことができるかどうか、それはこれからの8年間の我々自身の厳しい鍛錬によってこそ可能と思える。それを担うべき世代の方々の自覚と健闘を大いに期待したい。

謝 辞

国際伝熱会議の招致の話が始まってから2年近くに亘ったが、お陰様で良い結果を勝ち取れた。招致委員会委員の方々には、常に適切なご意見を頂き、間際まで各国アセンブリー委員への依頼などにもご尽力頂いた。吉田英生先生には開催提案書作りからプレゼンテーションまで、この一年共にご苦労いただいた。伝熱学会の3期にわたる荒木信幸、庄司正弘、望月貞成各会長、理事の皆様のご支援とご協力を賜った。荻野文丸、鈴木健二郎両先生には終始貴重なアドバイスを頂き、日本支持要請には、Eitaro Yamane、宇高義郎、菱田公一、川路正裕、高田保之ら各先生をはじめとして、各国アセンブリー委員や伝熱研究者に友人を持つ複数の方々にお力添え頂いた。ここに記して、多くの皆様に謹んで謝意を表したい。